

青べか物語異聞

横松和平太

はじめに

山本周五郎は、黒澤明監督の映画『椿三十郎』『赤ひげ』等の原作者であり、主に時代小説、歴史小説で著名な作家である。小説『青べか物語』は、周五郎の数少ない〈現代小説〉の傑作とされる。今日でいう浦安市、小説の舞台となった昭和初期当時は浦安町を浦粕町という仮名にして描いている作品だ。

今春、浦安市民である私は〈うらやす市民大学〉の聴講生となり、幾つかの講座を受け始めてみた。講座の中には、先輩聴講生達による自主学習会と称する講座もあり、その中に「青べか紀行」と題した講座があった。『青べか物語』の世界を座学と市内の所縁の地の散策で探訪するものであった。小説の題材となった市内の各所や、モデルとされる登場人物、又、周五郎その人のなりわいなどが詳しく紹介され、知ることができた。

そんな幾つかのエピソードの中に、大変に興味を引きつけられた話が出て来た。所謂、何となくイメージしていたものとは異なる話であった。

例えば、〈先生が買わされたのは、べか舟ではなく伝馬船だった〉とか、〈映画化された『青べか物語』は地元では不入りで上映中止になった〉等と云った話である。私は浦安市民となって、はや二十五年以上となる。しかし『青べか物語』がひと頃の浦安の代名詞であったことを承知はしてはいても、この小説をきちんと読んでいなかったことに気付かされたのだった。周五郎の作品が好きで、若い頃は殆ど読み尽くしていた筈なのに。本棚には文庫本がズラリと並んでいたのに。

そこで、この講座に触発され、『青べか物語』にまつわる異聞を自分なりに遅ればせながら探訪してみたくなったのだ。小説そのものだけでなく、評伝・映画のシナリオ・地元の人達への聞き書き資料・郷土博物館の資料、等々を読み進めることとした。まずは、周五郎が書いた『青べか物語』そのものをおさらいすることから始めてみることにしたい。

この作品は、昭和35年(1960)の1月から翌年の1月にかけて雑誌『文藝春秋』に連載された。小説では「貝と海苔と釣場で知られる根戸川の下流にある漁師町浦粕町」と仮名になってはいるが、明らかに昭和初年頃の浦安が舞台となっている。三十からなる短編に、「はじめに」というプロローグの章と「おわりに」というエピローグの章を挟み込み、さらに、三十年後の再訪記を付け加えた構成からなっている。

若き日の周五郎が体験したことを、当時の取材ノート・日記等を基に三十年という熟成期間を経て結実させている。ある意味、心の内の風景を形象化させた小品集、スケッチ集とも言うべき創作だと思える。当時、陸の孤島とも云われた海辺の漁師町の独特の風情、人情を所謂小説らしい技巧を排して、しぜんな文体で描いている。主人公の“蒸気河岸の先生、は鋭い観察眼で、楽天的でたくましく、時には狡猾・卑猥さまでを持ち合わせ、素朴に生きる庶民の姿を活写している。まるで映画『七人の侍』に出てくる農民達のように

ある。尤も、小説化に三十年という空白がいきなりあった訳ではなく、作者も「はじめに」の中で触れているように、先行作品群を昭和9年から10年頃にかけて発表していることを付記しておきたい。

意外に短くとも濃密だった浦安暮らし

山本周五郎こと清水三十六は、明治三十六年の六月二十二日山梨県の生まれである。三十六年生まれだから三十六〈さとむ〉と名付けられたとか。家が貧しく苦勞の多かった少年時代を過ごした後、横浜から上京。木挽町の質店山本周五郎商店に住み込みで働いた。この店の主人の名前が後に彼のペンネームになった、というのは余りにも有名な逸話だ。働きながらも小説家を志し、日本橋にも近い桜橋にあった雑誌社『日本魂』の記者をしていた時のことだった。記者仲間の『読売新聞』芸能記者、小野金次郎氏と同行して、深川の高橋から行徳行き定期蒸気船に乗って浦安を初めて訪れた。

小説連載直後の昭和三十六年二月三日付けの『朝日新聞』で、記者からのインタビューに答えて次のように語っている。

「地図を見ていたら“八犬伝、に出てくる行徳という地名が目に入った。ムラムラとこの行徳へ行きたくなった。途中満々と水をたたえた川〈江戸川〉の中に小さな町がベニスのように見えた。ああ、こんな所があるのか、と、おりてしまったのが浦安の町でしてね。二十五の年から七までノートとスケッチをとって暮らしました。」

この発言には、年齢について少し注意がいる。浦安を訪れたこの時が何時だったのか？についてである。当時彼が付けていた日記(氏の没後の昭和45年に『青べか日記』として刊行)には、浦安が登場するのが昭和三年八月十二日、恐らく七月末か八月上旬のことであつたと思われる。で、あれば、この時彼は満二十五才(数えなら二十六才)になったばかりである。ところが、文庫本『青べか物語』の巻末の解説(評論家・平野謙)では、――山本周五郎の年譜によれば大正十五年の春、千葉県浦安町へ移る、とある。「ぶらりと浦安へスケッチに出かけ、風景が気に入った」からそのまま昭和四年の春まで同地にとどまったのである。数え二十三才から二十六才までのことである。――と記してある。明らかに間違いと思えるのだが、周五郎の評伝にかけては第一人者の木村久邇典氏も指摘しておられるのにも拘らず今も訂正されていない。それどころかこの解説文は、今も“山本周五郎著『青べか物語』のモデル、を売り物にしている船宿〈吉野屋〉のホームページでも引用されている。平野謙氏は一体何を根拠に書かれたのであろうか？事実誤認であろう。

浦安を去ったのは昭和四年の春ではなく、秋である。前述の日記によれば九月二十日が最後の日である。つまり、満二十六才(数えなら二十七才)の時であつた。本当は一年とわずか余りの滞在に過ぎないのに、足掛け四年余りのこととされているのが、よくわからないのだ。

ある説によれば、「周五郎にとっての浦安体験が、本人にとっては実際以上に長く感じさせた程濃密だった」からだ、とか「浦安びとたちの山本さんに対する敬愛の念が、ややオーバーに滞在期間を永くすることによって親近感をあらわそうとした」からだ、とか云われ

ているがどうだろうか？ 単なる誤伝・勘違いでは。ただ、ひよっとしたら周五郎の発言自体が時によってブレていたりしたのかも知れない。何せ周五郎という人は“食言の人、”としても知られた人なのだから。

ぶらりと降り立ち、周五郎の浦安暮らしが始まった。最初にどこに下宿したのか判っていないのだが、翌年に浦安を去るまでの一年余りの間に引っ越しを四回もしている。

〈柳の家〉〈吉野屋〉〈芒屋〉〈土堤の家〉であるが、船宿吉野屋以外は現存しない。浦安の蒸気河岸から蒸気船に乗って深川・高橋まで行き、そこから都内・桜橋の勤務先までは歩いて通ったと云う。片道少なくとも一時間半から二時間はかかったようで、(今なら30分とかからないのだが)しばしば遅刻した。勤務態度不良と見られ、折からの不況も重なり十月には解雇つまりリストラの憂き目に会ってしまう。小津安二郎監督の映画『大学は出たけれど』が公開されたのは昭和四年のこと。そんな時代だった。

経済的には当然苦境に陥った。生活費にも事欠き、原稿用紙も買えないような日々だったという。その上、病気(軽い肺湿潤)、失恋、作品も中々認められない、等々まさにどん底の時代だった。

浦安に全く知人もいない状態で移り住んだ訳ではなかった。土地の資産家で、当時『中外商業新報(今の日経新聞の前身)』の社員であった高梨氏夫妻には、公私ともに世話になっている。売れない小説を書いている他は、蒸気河岸辺りをぶらつき、「青べか」で浅瀬や用水堀に出ては釣り糸を垂れたり、昼寝をしていたのは小説にある通りであった。ただ、苦闘生活だけが続いていたのかというと、案外そうでもなかったりしている。日記の記述によれば、遊郭通いもしていたし、地元の浦安亭で浪花節を聞いたりした。上野へ出かけて美術展を見たり、旅行にでかけたりもした。児童映画の脚本の懸賞金が入り、北海道への長旅もしたとある。

こんな浦安暮らしに見切りをつけ、去ることになったのは、日記によれば昭和四年九月二十日のことであった。

小説では、「私は浦粕から逃げ出した。その土地の生活にも飽きたが、それ以上に、こんな田舎にいてはだめだ、ということを知ったからだった。書き上げた幾篇かの原稿と、ノートとスケッチブック5冊とペンを持っただけで、蒸気にも乗らず、歩いて町から脱出した。」とある。

日記では、「凡ての計画は破れた。余は浦安を獺(かわうそ)のように逃げる。多くの嘲笑が余の背中に投げられるだろう。」今やディズニーランドになっている所の近くには獺や鼬が棲んでいたのである。世話になった高梨家にも何の挨拶もなしで、家の中は電気さえ付けっ放しのままで、まさしく逃げ出したのだった。

歩いて浦安から逃げ出したのだが、その逃走ルートが気になった。当時、浦安から東京方面への交通手段といえば定期蒸気船が主であった。それ以外には、遠回りに迂回することにはなったが市川の八幡まで乗合バスがあり、更に都内へ乗り継ぐという方法があった。大正十五年から運行していたが、料金が高く庶民の足ではなかったようだ。無職で貧乏小説家志望の青年には、当然縁がない。よって歩く他はなかったのだが、江戸川を越えなけ

れば東京へはたどり着けない。何処かで橋を渡らねばならない。今日のように浦安橋はまだ架かってはいない。日記や談話等の資料には書かれていないが、推測するにおそらくは行徳にあった下江戸川橋(現在の今井橋より少し上流に架かっていた)を渡ったのではなからうか？ このルートを歩いて都心まで行くとするなら4時間近くかかったかも知れない。現代人と違って当時の人は健脚だった。因みに、私は都心から浦安まで歩いて見たことがあるが、ほぼ直線に近いコースであったが3時間はかかった記憶がある。

周五郎氏が、歩いてその日どこに辿り着いたのか定かではないが、次に下宿したのは、虎ノ門は晩翠軒裏の仕立て屋の二階だった。この短くも濃密だった浦安暮らしが、後に熟成・発酵し名作『青べか物語』に結実した。

べか舟、実は伝馬船だった

『青べか物語』という題名は、作品の冒頭の章「青べかを買う話」に由来している。芳翁という狡猾なところもある爺さんから、オンボロの青く塗られたべか舟を買わされてしまう話なのだが、この話に登場するべか舟は、実はべか舟ではなく伝馬船であった、という見方が地元では通説だ。

べか舟とは、浦安をはじめ東京湾全域で見られた一人乗りの海苔採集用の木造船のことである。小説の中では「べか舟というのは一人乗りの平底舟で、多く貝や海苔採りに使われ、笹の葉のような軽快なかたちをしていて、小さいながら中央に帆桁もあって、小さな三角帆を張ることができた。」と紹介している。だが、地元では次のような証言がある。

「周五郎が買った青べかは濃い水色で塗られ五六人乗っても大丈夫なほど幅が広いもので、べか舟ではなく、下肥を運ぶ伝馬のような船だった。」

船宿・吉野屋の末っ子で当時六才位で、かすかに周五郎と遊んだ記憶があるという吉野実さんの談話を、郷土資料館の“浦安よもやま話、”という展示物がこう伝えている。

又、元舟大工の宇田川信治さんは、雑誌『サライ』のインタビュー記事の中で、「舟大工として、あの小説を読んでみますと、登場する舟はどうしても“べか、”じゃないようです。当時の浦安町堀江の親方が作った伝馬船じゃないかと推測しています。伝馬はべか舟に似ていますが、ちょっとお尻が大きい。川の渡しだとか、農家が稲や肥やしを運ぶときに使った船で、普通は“べか、”と呼びません。堀江の伝馬は堀割で使うことが多くて、べか舟と同じくらいの長さなんですよ。周五郎先生はそれのおんぼろをつかまされたんじゃないですか？ (笑い)」「子供たちも(小説の中の「青べか馴らし」の章で)ぶっくれ舟なんて軽蔑して石を投げているでしょう。肥やしの匂いがしみついたような古い伝馬だったと想像します。“べか、”に石なんか投げたらしかられましたよ。昔の浦安は海苔で成り立った漁師町で、“べか、”は大事な商売道具ですから。」

と、答えている。実に説得力のある談話でなからうか。周五郎はべか舟を買ったのではなく、オンボロの伝馬船を買わされたのだった。

もっとも、周五郎はこのことに気付いていたようである。何故ならば、小説の中で、「しかしそこに伏せてあったのは、胴がふくれていてかたちが悪く一 見るからに鈍重で

不恰好だった。」と書いている。『青べか物語』に先行して昭和九年に俳誌『ぬかご』に発表した短編『青べかを買う』では、「実をいうと私の買い取った彼女(べか舟のこと)はやや大きく、普通のものに比べて胴も無様にふくれていて、明らかに一時代前の作品である……」とも書いている。周五郎は自分が買ったべか舟が、所謂“べか”ではないことに気付いていた。だが、それが、下肥えなどを運ぶ伝馬船だった、とまでは気付いてはいなかった。と、いうことであろう。芳爺にぶっくれ舟をつかまされたのだった。しかし、小説の題名を『青べか物語』としたのは間違っていなかった。『青伝馬物語』では何かしくくりこないのだ。このタイトルでは名作として世に残ったかどうか覚束ないのでは？

蒸気河岸の先生は忘れられていたのか？

小説の最後にある「三十年後」という章で、先生が浦泊を去ってから三十年後に町を再訪した時のことが書かれている。かつて下宿した船宿で、当時最も馴染みであったはずのこの家の息子「長」やその母親と再会したのだが、蒸気河岸の先生と呼ばれていたはずの周五郎のことを思い出して貰えなかった、というくだりがある。これについては、この時同行した木村久邇典氏も、彼の著書の中で証言しておられる。又、『文藝春秋』連載の翌年の『アサヒグラフ』の浦安再訪企画の文や写真でも同様の表現がある。

しかし、この逸話はどこまで本当なのであるだろうか？ 先述の単行本の解説のなかで平野謙氏は、こう書いておられる。「事実問題として、果たしてこういう事態があり得るものか、いささか疑問だが……」

私も同感である。まったくの事実とは思えない節がある。

『浦安・海に抱かれた町』という本がある。地元の人達から昔のことを聞き書きした話を編集したものだ。この中の、船宿〈岩田屋〉の岩田よしさんの談話に注目したい。

—「私は見てはいないけど、山本周五郎って人のことは、連れ合いが知っていたね。吉野屋さんの家作にいたのは、私が嫁にくる二年前昭和三年だね。何でも少しの間しかいなかったらしいけど、汚いかっこうして、しょっちゅう川端で釣りして、遊んで暮らしているふうだって。小説書いているのは当時みんなしてたらしいよ。そういう人は頭がいいから、変わり者だったんでしょ。」普通の人感覚から見れば、さほど変化のない暮らしの続く田舎の漁師町に突然現れ、突然去っていった、小説書きの変な遊び人の先生を、覚えていない訳がないのではなからうか？

では、木村氏や〈長やその母親達〉が先生を覚えていなかった、という証言は一体何なのであるだろうか？ これは、小説の中の周五郎のもの言いに対しての一種の迎合というか、口裏合わせというか、ひょっとしたら善意のやらせ、だったとは考えられないか。

小説の中での、蒸気河岸の先生と浦泊の関係は、所謂よそ者部外者として描かれており、先生と住人達との会話でさえも、注意深くほとんどその存在を消されてさえている。作者としての周五郎は〈私〉をなんの痕跡をとどめ得ない無に等しいような存在にしておきたかったのだ。つまり先生を覚えていて欲しくはなかった、という設定だった。

周五郎のこの作品におけるレトリックに本人のみならず、周五郎の弟子であり研究家であった木村氏も小説の登場人物である〈長やその母親達〉も、『アサヒグラフ』の企画もその企てに加担したのではなからうか？

「おわりに」という章の中に、浦粕を去って六年後に書いた短編『留めさんとその女』のモデルとなった留めさん本人に、蒸気船で偶然に遭遇した話が出ている。その時、留めさんが作者に向かって「(小説を)おら家宝にすんだよ」と感謝されるくだりがある。つまり留めさんは、はっきり先生のことを覚えていたのである。小説『青べか物語』は『文藝春秋』に連載当時から評判になっていた作品。浦安が舞台であることも、その登場人物のモデルとおぼしき人のことも地元では話題になっていたはずである。周五郎と再会した時の〈長〉は、その時既に壮年になっており、覚えていないはずがない。ただ、周りの人達への慮りや照れもあったかもしれない、思わず覚えていないふりをしてしまった。、ということかも知れない。そこをうまく周五郎は小説として作品化した、ということかも。残念ながら当事者およびその周辺からの証言は見つけれなかった。詮索するのは野暮ということかも。

まぼろしの浦安再訪

逃げるように浦安を去ってから、周五郎は三度浦安を訪れたとされている。まず一度目は、八年後の昭和十二年のことであった。この時までに既に浦安時代の体験を題材とした幾つかの短編を、俳誌『ぬかご』や『アサヒグラフ』に発表していたが、写真家の秋山青磁、森谷文吉に写真撮影の案内を頼まれてのことという。先述の留めさんとの遭遇はこの時のことである。その「おわりに」の章の最後の文章でこう書いている。

「私は二人の同伴者と通船に乗ったとき、もう二度とこの町へ来ることはないだろう、心の中で呟いた。」

だが、再びおとずれることになったのだ。「ぜひもう一度青べかの世界をみにゆきたいという誘惑にかられ、ノートをまとめて発表したのを機会にふと思立った勢いで、十月下旬の或る日、私は二人の同行者ととも浦粕町へ行ってみた。」(「三十年後」)
これは『文藝春秋』にまだ連載中の昭和三十五年のこと。二人の同行者とは、一人は木村久邇典氏、もう一人は周五郎の原稿整理など秘書のような仕事をしていた木村ふみ子氏であった。この二度目の訪問を終えて浦安を去るにあたり「私は近いうちに、もう一ぜひ浦粕へ、今度は釣り客としていってみるつもりである」と、書いていた。だが、実際に訪れたのは釣り客としてではなく、雑誌の企画取材の為だった。

十月の訪問のすぐ翌月、小説の執筆を終えた後、雑誌『アサヒグラフ』の企画に応じて、写真家の林忠彦氏らとともに訪れた。これで三度目になった。この後、昭和四十二年に逝去するまで、訪れることはなかった、はずなのだが、まぼろしの再訪を伝える文章に出会ってしまった。

数々の山本周五郎に関する著作で知られる木村久邇典氏の著書『青べか慕情』(昭和55年刊)の中に、こんな話があった。

一わたしは浦安町の繁華街のその中心にある〈市兵衛〉というすし屋に入った。(中略)そして店主はいった。「山本先生も、わたしどもに来られましてね。ちょうど映画が撮影された年でしたから、三十七年のことだったと思います。先生は女の秘書のような人と、

あなたが座っていらっしゃるその椅子で、日本酒を召し上がってゆかれました。その時は、原作者だとは知らなかったのですが、あとで写真をみてわかりました。」 というのである —

この話を筆者は、「店主の人違いに寄る錯覚であったろう。それに山本さんはその時分、日本酒は敬遠してもっぱらウィスキーに切り替えていたのである。」と、断言され浦安町での新しい「山本伝説」の誕生としておられる。

だがどうであろうか？ 映画『青べか物語』は川島雄三監督により、確かに昭和三十七年一ヶ月半に亘る現地ロケが行われ、制作公開されている。同著の中には、くだんのすし屋の壁には主演の森繁久彌の色紙も貼り付けられていたとある。女の秘書といえば先述の木村ふみ子氏のような。古くからの地元民からの聞き取りによれば、〈市兵衛〉という寿司屋も確かにあったようだ。場所はかつての浦安のメインストリートにあったと云う。昭和四十四年の古い住宅地図で、確かめてみた。既に寿司屋の〈市兵衛〉はなかったが、近くに映画館もあった中心街にあったことが分かる資料も見つけた。本当に木村氏が言うように人違いによる錯覚なのであるか？ 映画の原作者としての撮影現場の立会いがあったのかも知れないのでは。映画関係の資料も当たってはみたが、確たる傍証は得られなかった。検証の余地がまだあるのでは？ と思えてならない。

地元で不入りの映画『青べか物語』

郷土資料館の資料パンフレット「周五郎が愛した『青べかの町』」の中のコラムにこうありました。「青べか物語は、昭和三十七年に映画化されました。そこで浦安劇場では、この映画を上映することになります。しかし、上映初日、二日目は客がはいったのですが、三日目には十人ぐらいに客が減り、四日目にはとうとう客が入らなくなり上映を中止したというのです。その要因を青べか物語が浦安に実在する人物、事件を題材にしていたからではないか」と紹介されている。「浦安を一躍有名にした一方で、町民には、「誇張しすぎている、「嘘が多い」といった批判の声も強く、評判があまりよくなかったようです」ともある。映画がまだ大衆娯楽の花形であった時代だったにもかかわらず、不入りで上映中止になった、とは余程のことだ。

これについては、こんな風に考えたいのだが如何であろうか？

周五郎は、自らの体験に基づき実在の人物や事件を題材にすることで、町民達に誤解やら迷惑をかけるのでは？ と危惧していた。又、「純朴な人達のことを小説に書いて生活の資にすることは恥ずべき行為だ」、ともいっている。それ故に、小説化にあたっては仮名にするなど色々と配慮していた。小説のタッチもある意味ファンタスティックな心象風景だったりしている。小説という活字媒体であった内はまだ、その生々しさが目立たなかった。しかし、映画という媒体に映像化されることで、それは拡大・増幅されていったのではなからうか？ 何せ、監督はあの幕末太陽伝で有名な川島雄三。日本軽佻派を名乗り、含羞にとみ、卑俗にしてセンスのよい独特な喜劇を得意とする人だ。脚本はあの新藤兼人、これまた一癖ある。俳優も森繁久彌に東野栄治郎など個性派が目立つ。

作品はビデオ化されてはいないので、中々お目にかかれませんが、脚本は当時の『キネマ旬報』に収録されており、それを読んでみた。新藤兼人氏へのインタビュー記事もあったが、こう発言していた。

「プロはプロらしくというのが私の信条だ。(中略) この試合ははじめからグラウンドも選手も決まっていた。だから変化球を多投した試合になった。(中略) 三十年も前の話であるが、どうやらそのまま今日に通じているようである。」

変化球を多投していたのであった。昔の話と現代の話とただだけでなく、原作の中の〈浦粕〉の人達の明るく、たくましく、純朴ではあるが、狡猾にして、卑猥なところをよりデフォルメしカリカチュア化したのであった。小説を、より俗っぽくしたヒューマンコメディにしたのだった。例えばラスト近くのこのシーンである。

一先生の声で「私はこの土地を去る決心をした。ここはあまりにも刺激が強すぎる。あまりにも人間的すぎる。あまりにも浦粕的すぎる……」の台詞に続き、一一芳爺「小説の先生、東京へ帰って行くつうぞ」一一勘六「おら、先生が逃げ出す理由がわかっただよ」一一浦粕軒「なぜだ」一一勘六「おっ立たなかつただよ」一一わに久「なるほど」(中略)一一勘六「先生惜しいことしただな」一一浦粕軒「おっ立たねえじゃしょうがあんめえ」一一一同大笑い一一 とある。

実に下品にカリカチュア化されているのではないか。小説はともかく、映画が地元では評判がわるかったのは当然であろう。今の自分達のことをネタに、下品な笑いの対象にされたのでは、気分がよかるうはずがない。町名だって「粕、粕」と呼ばれたのでは。

当の原作者である周五郎先生は、一体どんな感想をお持ちであったのだろうか？ 資料をあたってみたが、残念ながら探しきれなかった。因みにこの作品、その年の『キネマ旬報』ベストテンでは、年間第三十六位とあった。

浦安の大変貌は『青べか物語』の頃に始まっていた

浦安といえば、今日ではディズニーランドの街としてイメージが定着しているが、オープンしたのは昭和五十八年四月のこと。今から二十七年前のことになってしまった。小説『青べか物語』は昭和三十五年、映画『青べか物語』は昭和三十七年に創られた。ディズニーランドに先立つこと二十年以上も前、今から遡れば五十年近く前の海辺の漁師町が舞台であった。「青べかの町」はリゾートタウンと住宅地と鉄鋼団地からなる、都心からわずか十五分の、成長する「緑あふれる海浜都市」へと大変貌を遂げたのである。しかし、その大変貌の始まりが、実は『青べか物語』の頃にあったのである。今回、周辺資料を読み進める内に気付かされた。

映画『青べか物語』の脚本を書いた新藤兼人氏は、当時の『キネマ旬報』の記事の中でこう述べていた。一 ロケハンに訪れた浦安の寿司屋のおかみさんとの会話である。

「ここもむかしとはずいぶん変わったんでしょね。」「全くさびれちまったんだよ。むかしは、賑やかでよかったもんだ。野郎もたんまりいたしよお。ハマグリも味がよかったんだよ」人間がへったという町が日本にもあるんである 一

浦安町が貝や海苔の養殖等で最盛期を迎えたのは昭和二十七年頃のことだったという。しかし、昭和三十年代に入ると、工場廃水や生活排水で漁場が次第に汚染され、水産・漁業関連の仕事は衰退の一途を辿り、昭和三十一年には財政再建団体の指定を受けるまでに窮乏化したという。映画のロケが行われた頃は、世の中高度成長が始まっていたというのに浦安はたしかにさびれていた、のだった。

周五郎先生や川島雄三、新藤兼人たちはご存知なかったのであろうが、その苦境の時代に今日の変貌への胎動が始まっていたのだった。浦安町が「浦安総合開発審議会」を発足させたのが昭和三十二年。千葉県に対し「海面の埋立事業による大規模遊園地の造成、鉄鋼流通基地の形成、住宅地の造成の実施」を要請することを決定したのが昭和三十四年であった。それからは紆余曲折はあったものの、漁業権の全面放棄、埋立工事の本格化、地下鉄東西線の開通、ディズニーリゾートの拡充、京葉線の開業等と続き、今日に至る。

郷土博物館の企画展によれば、名古屋の中心から比較的近いところに中川区下之一色という町があり、昭和三十年代の初めまで浦安と同じように繁栄した町という。海辺の三角州上に出来た同じような漁師町であった。だが、五十年余りを経た今日、その姿は大きく異なってしまった。下之一色はさびれたままであるという。この違いは一体どこから生まれたのだろうか？ 単なる運だけではないだろう。変化は急に始まる訳ではない。

二十年、三十年という長期で構想することの大切さを考えさせられた。

『青べか物語』の中にあった〈浦粕〉は大変貌を遂げ、今や若い世代からみて住みたい街ナンバーワンらしい。当時の住民の末裔たちは、駅前のスポーツクラブで汗を流し、漁師町の面影や〈べか舟〉は、郷土博物館の屋外展示場にそのよすがを偲ぶばかりである。

おわりに

浦安と『青べか物語』にまつわる異聞を拾い集め、纏めたのは平成二十二年の秋のことだった。しかし、明けて平成二十三年の三月十一日、災害は突然やって来た。東日本大震災である。東北地方の太平洋岸への大津波、福島県原発事故と未曾有の災害となった。当初は余り報道されなかったが、浦安も大規模な液状化現象に見舞われた。市域の3/4が程度の差こそあれ、道路や下水道等のインフラを破壊され、住宅地を中心に地盤の沈下・傾き、泥の噴き出し等の現象が広範囲に起きた。リゾートタウンのイメージは大きく傷つけられ、一時は逃げ出す人も出て人口が減ったとか。浦安が町から市になったのは昭和五十六年(1981)、それ以来増加することはあっても減ることは無かったのだが。歴史的にみると浦安はほぼ六十年おきに大災害に見舞われてきた。昭和二十四年(1949)のキティ台風等、水による自然災害との戦いの歴史であったという。浦安は昭和三十九年(1954)に始められた海面埋立事業で、面積が約4倍、人口が約10倍になった街である。市役所・文化会館・図書館が立ち並ぶ一体は、今では市の地理的には中心部であるが、その先は『青べか物語』の頃は海辺であったところだ。液状化現象に襲われたところは全て海面埋立で出来た地域だった。今度は直接的には水害ではなく地震であった。

かって海であったところが、海に戻りたいと震え泣き叫ぶかのように、海が液状化現象となって襲って来たのだ。

(了)